# *A Romance of the Republic* における Mr.King の変化と役割

高　瀬　祐　子

リディア・マリア・チャイルド（Lydia Maria Child）の長編小説である『共和国ロマンス』（*A Romance of the Republic*）は、19 世紀後半から南北戦争終結までを時代設定とし、裕福な白人として育ったローザとフローラという美しい姉妹の人生を軸に展開する。姉妹の父が突然亡くなることによって、実は奴隷であることが発覚した 2 人の生活は一変し、そこから物語は大きく動き出す。この作品は 2 部構成になっており、第 1 部では、2 人がニューオリンズで幸せに暮らしているところからはじまり、父の突然の死、黒い血の混じった奴隷であることの発覚から、ローザの偽りの結婚、フローラの失踪、ローザのヨーロッパへの逃亡などを経て、ローザが父の友人の息子キングと結婚するところまでを描いている。第 2 部では、離れ離れになっていた姉妹の再会やローザが取り替えた子供のその後が描かれ、南北戦争を経て、家族が再び集まる場面で物語は終わりを迎える。

のちにローザと結婚することになるアルフレッド・キングは、物語の冒頭で登場しローザに好意を抱くが、その後物語の舞台からぱったりと姿を消してしまう。そして、長い年月を経て再びローザの前にあらわれ、彼女にプロポーズをし、彼女の夫となるが、その時から物語を「支配する」（Karcher 96）ようになる。そして、第 2 部ではキングを中心に物語が進み、キングは他の登場人物たちの人生に大きな影響を及ぼす存在となる。この作品におけるキングの変化と役割を彼の言動や行動から探ってみたい。

## 【出会い】

本作品におけるキングの登場場面は、彼の果たす役割において 3 つに分類することができるだろう。まず、ひとつめはキングがはじめて姉妹と会う「出会い」の場面を含む、第一部の冒頭部分である。北部ボストンの裕

福な白人であるキングはローザの父ロイヤルの親友の息子として登場する。そして、ロイヤルから彼の2人の娘たちを紹介され、姉ローザに好意を抱く。しかし、ジェラルド・フィッツジェラルドから2人が黒人の血が混じった奴隷であることを聞かされると動揺し、彼女たちに深く関わることなく北部に帰ってしまう。

**1．姉妹との対面**

These radiant visions of beauty took Alfred King so much by surprise, that he was for a moment confused (4).

キングは姉妹と出会い、2人の「光輝く美しさ」に驚く。特に姉ローザに心を奪われ、欲望の対象として彼女を見ている。

**2．姉妹が混血だと知る**

Octoroons! He [Mr. King] repeated the word to himself, but it did not disenchant him. It was merely something foreign and new to his experience, like Spanish or Italian beauty. Yet he felt painfully the false position in which they were placed by the unreasoning prejudice of society (14).

キングは姉妹に出会った日の夜、フィッツジェラルドから彼女たちの母が混血であり奴隷であることを知らされる。南部の男であるフィッツジェラルドが2人を買ってハーレムのように暮らすことを夢想するのに対し、キングは心を奪われた女性が奴隷であることに動揺する。

**3．キングの母 I**

Though he had had a fatiguing day, when he entered his chamber he felt no inclination to sleep. As he slowly paced up and down the room, he thought to himself, "<u>My good mother shares the prejudice. How could I introduce them to *her*?</u>" Then, as if impatient with himself, he murmured, in a vexed tone, "Why should I think of introducing them to my mother? A few hours ago I didn't know of their existence." （14、下線は筆者）

キングはローザが奴隷であることを考えて苦悩するが、なぜか「母にローザを紹介する」ことを想像する。つまり、キングはローザと自分が結婚すると仮定し、その場合どのような問題が生じ、母が奴隷と結婚する自分を認めてくれないだろうとすでに考えているのである。キングがローザに好意を抱き、結婚したいと思っているのは明らかだが、それが周囲にどう思われるかということがキングの足かせとなっている。そして、周囲の反応、つまり世間体を象徴しているのがキングの母である。

### 4．兄として

"Excuse me, young ladies, if, in memory of our father's friendship, I beg of you to command my services, as if I were a brother, should it ever be in my power to serve you." (26)

キングはローザに特別な好意を抱きながらも、母に代表される周囲の目、世間体を気にするばかり、「兄」として力になろうと申し出て、ボストンに帰る。

冒頭部分で描かれるキングは、自分のローザに対する気持ちに気づきながら、ローザが奴隷であることを知り、その気持ちを封印しようとしている。奴隷の女を妻にすることはできないと思っている。そして、ローザと結婚できない理由を象徴しているのがキングの母である。母はキングにとって、彼の属している共同体の象徴であり、母がなんと言うか想像することは、ローザと結婚した場合、彼が共同体においてどのように見られるかを考えることである。作品の冒頭部分におけるキングは、作品の「支配者」とはほど遠い、母の目を気にする「お坊ちゃん」として登場しているのだ。

**【再会】**

再びキングがローザの前にあらわれるのは第１部の終盤である。この時はすでに父親の保護のもと幸せに暮らしていたローザの立場も状況も一変している。ローザは父の死後、偽りの結婚によりフィッツジェラルドに奴隷として買われる。幸せな暮らしも束の間、フィッツジェラルドがリリーベルと結婚することを知り、自分が妻ではなく奴隷として買われたことを

知る。さらに彼の子供を産み、再び奴隷として売られることを恐れてヨーロッパに逃亡し、ローマでオペラ歌手として舞台に立っていた。

**5．キング再登場**

At the same moment, a hand rested gently on the Signor's shoulder, and a manly voice said soothingly, "Be calm, my friend." Then, turning to Mr. Fitzgerald, the gentleman [Mr. King] continued: "Slight as our acquaintance is, sir it authorizes me to remind you that scenes like this are unfit for a lady's apartment." (236)

歌手として舞台に立つローザを見たフィッツジェラルドがローザのもとに来るという緊迫した場面で突然キングが救世主のようにあらわれる。

**6．説明するキング**

Mr. King compressed his lips tightly for a moment, as if silence were a painful effort. Then turning to Rosa, he said: "Pardon my sudden intrusion, Miss Royal. Your father introduced me to the Signor, and I last night saw him at the opera. That will account for my being in his room to-day." He glanced at the Italian with a smile, as he added: "I heard very angry voices, and I thought, if there was to be a duel, perhaps the Signor would need a second. You must be greatly fatigued with exertion and excitement. Therefore, I will merely congratulate you on your brilliant success last evening, and wish you good morning." (237)

ローマで舞台に立つローザを見つけたフィッツジェラルドはローザのもとにやってくる。そこに突然キングがあらわれる。キングはなぜ自分がここにいるのか説明する。

**7．突然のキング訪問**

"Only to think of Mr.Fitzgerald's coming here! His impudence goes a little beyond anything I ever heard of. Wasn't lucky that Boston friend [Mr.King] should drop down from the skies, <u>as it were just at the right minute</u>; for the

Signor's such a flash-in-the-pan, there's no telling what might have happened. Tell me all about it, dear." （238、下線は筆者）

これはローザの母代わりとして彼女に同行していたマダムのセリフである。マダムが指摘しているように、キングが再登場するタイミングは絶妙であり、いささか唐突でもある。

**8．対立**

But you will recollect that I met her in the freshness of her young life, when she was surrounded by all the ease and elegance that a father's wealth and tenderness could bestow; and it was unavoidable that her subsequent misfortunes should excite my sympathy. She has never told me anything of her own story, but from others I know all the particulars. It is not my purpose to allude to them; (239)

キングがフィッツジェラルドに言ったセリフである。フィッツジェラルドとキングはローザをめぐって対立する。ローザはフィッツジェラルドのもとから逃亡した逃亡奴隷であり、フィッツジェラルドは彼女を取り戻そうとする。キングはフィッツジェラルドに対して、彼女の気持ちをくみ取るように促す。

**9．保護者 I**

But she was unconscious of his continual guardianship, and he was careful that she should remain so. Every night that she went to the opera and returned from it, he assumed a dress like a driver's, and sat with him on the outside of the carriage,— a fact known only to Madame and the Signor, who were glad enough to have a friend at hand in case Mr.Fitzgerald should attempt any rash enterprise (245).

フィッツジェラルドに狙われているローザの身を守るため、キングはローザを影から見守る役目を請け負う。

**10．キングの母II**

"What would my dear prudential mother say, to see me leaving my business to agents and clerks, while I devote my life to the service of an opera-singer? — and who has been the victim of a sham marriage!"（245、下線は筆者）

はじめてローザに会ったあとのように、キングは再び今の自分の状況を母が見た場合のことを想像する。「思慮深い母」が「人生をオペラシンガーにささげている」今の息子を見たらなんと言うだろうかとつぶやく。

**11．キングの母III**

"My dear mother has gone to a sphere of wider vision, whence she can look down upon the merely external distinctions of this deceptive world. Rosabella must be seen as a pure soul, in eyes that see as the angels do; and as the defenceless daughter of my father's friend, it is my duty to protect her."（246、下線は筆者）

キングの属する共同体の象徴であり、キングがローザへの思いを断ち切ろうとした理由でもある母はこの時すでに亡くなっている。キングはローザへの思いを、「彼女を守ることは自分の義務である」と自分の行為を正当化している。母の死により、キングは母に象徴される共同体の「お坊ちゃん」から抜け出すことができた。管理され、監視される共同体を抜け、新たな共同体（彼自身の家庭）を自ら作ることができるようになった。

**12．保護者II**

So he removed from his more eligible lodgings in the Piazza di Spagna, and took rooms in the Corso, nearly opposite to hers, where day by day he continued his invisible guardianship (246).

キングはだんだんとローザのそばでローザを見守るようになる。母を亡くしたキングは、徐々にローザとの物理的な距離を縮めていく。

**13．キングの愛の告白**

I have loved you from the first evening I saw you. Judging that your affections were pre-engaged, I would gladly have loved another, if I could; but though I have since met fascinating ladies, none of them have interested me deeply (250).

**14．幻想と現実**

"I do not wish you to experience the illusion of love again," he replied. "But my hope is that the devotion of my life may enable you to experience the true and tender reality."（251、下線は筆者）

キングの告白を受けたローザは自分の過去を考え、一度は断る。しかし、キングはローザを説得する。フィッツジェラルドとの恋が“illusion”と表現されているのに対し、キングは“reality”を経験させることができると言う。つまり、キングとの結婚こそが現実であり、フィッツジェラルドとの結婚は幻想に過ぎない。

**15．キングの告白**

From Madame and the Signor I have learned the whole story of your wrongs and your sufferings. Fortunately, my good father taught me, both by precept and example, to look through the surface of things to the reality. I have seen and heard enough to be convinced that your own heart is noble and pure. Such natures cannot be sullied by the unworthiness of others; they may even be improved by it (251).

キングとの結婚をためらうローザに対し、キングは言葉を重ねる。

母を亡くし、ローザと再会したキングは母が象徴する共同体の息子ではなく、自らが共同体を作ろうとする立場に変化している。そして、実際にキングはローザと結婚し、彼が自ら家庭という共同体を作っていく。

**【結婚後】**

キャロライン・カーチャー（Carolyn L. Karcher）はキングとローザの

結婚がもたらすテクスト上の変化について次のように指摘している。

> Rosa chooses rather to fill the traditional role an upper-class wife, and from this point on, King comes to dominate the novel, while Rosa degenerates into helpless dependency. Their marriage becomes a paradigm of gender and race relations in the post-Civil War world, as King unilaterally takes the responsibility for undoing the evils slavery has entailed on the Royal, King, and Fitzgerald families (Karcher 96).

この結婚により、ローザは上流家庭の夫人になり、キングがこの作品を「支配する」ようになる。第1部では、主にローザとフィッツジェラルドの偽りの結婚が描かれるのに対し、第2部はキングを中心に物語が進む。しかし、キングは主役に躍りでるのではない。カーチャーが指摘している通り、彼は第2部を支配しているのであり、彼によって物語が進行する。

キングはローザから自分の赤ん坊とリリーベルの赤ん坊を取り替えたことを知らされると、まるでそれが彼の使命であるかのように、取り替えられた子供、ジョージ・フォークナーの救出に取り掛かるようになる。キングは死んだと思われていたジョージが生きていると知ると、リリーベルの父、つまり、ジョージの実の祖父に当たるベルの所へ向かう。なぜなら、ジョージはベルの血のつながった本当の子孫であり、正当な相続人だからである。キングはローザの行った赤ん坊の取り替え行為により、ねじれた権利を元に戻そうと奔走する。

### 16．ベルへの提案 I

If you choose to disinherit Gerald, I will provide for his future as if he were my own son; and I will repay with interest all the expense you have incurred for him (392).

キングは、もしベルがジェラルドを「相続人排除」にするなら、自分が「彼の将来に備え、自分の息子として、ベルがジェラルドのために負うであろうすべての費用を出す」と提案する。キングはベルが本当の孫であるジョージに財産を相続することを望んでいる。キングはベルに赤ん坊の取

り替えが行われたことを告げ、ジェラルドは、本当は奴隷の子であり、黒人であるという事実を知らせる。

### 17．ベルへの提案II

I will myself go in search of him, and I will take him [George] to Europe and have him educated in a manner suitable to his condition, as your descendants and the heir of your property (393).

さらにキングは「彼（ジョージ）を探しだし、ヨーロッパへ連れていき、ベルの子孫であり、財産の相続人として身分に合った習慣に教育する」と申し出る。しかし、ベルは自分の財産が黒人もしくは、黒人と結婚した者の手に渡ることのどちらも受け入れることができず、さらにはこのショックで急死してしまう。ベルの財産はジェラルドが22歳になったら、ジェラルドの手に渡るよう手配されていたが、ジェラルドの戦死とベルの急死により、ベルの遺産は娘であるリリーベルのものとなる。

### 18．キングの財産をジョージに与える

I have already invented that sum [$50,000] for George, and placed it in the care of Mr.Percibal, with directions that the interest shall be added to it from that date. The remainder of Mr.Bell's property, with the exception of some legacies, was unreservedly left to his daughter, I have taken some pains to ascertain the amount, and I shall add a codicil to my will leaving an equal sum to George. If I survive Mrs.Fitzgerald, the interest on it will date from her decease; and I shall take the best legal advice as to the means of securing her property from any claims, by George or his heirs, after they are informed of the whole story, as they will be whenever Mrs.Fitzgerald dies (415).

ジェラルドとベルの死により、交換によってねじれた相続問題を元に戻すことは不可能になる。そこで次にキングが考えたのは、自分の財産を使うことだった。ベルは孫（ジェラルド）が22歳になったら50,000ドル支払われるように手配していた。それを受けてキングはローザたちに、「ベルが孫に遺そうとしていた金額と同じ額の財産をジョージのために遺すつも

りだ」と話す。つまり、本来ジョージが受け取るべき財産の額は、交換が行われなかった時と等しいことになる。もちろん、ジョージが奴隷として育ち、売られ、働いた時間を取り戻すことは不可能だが、ジョージがベルの本当の孫として受け取るはずだった財産は、ベルの代わりにキングによって与えられる。

**19．ジョージに仕事を与える**

I intend to employ the young man [George] as one of my agents in Europe; and if he shows as much enterprise and perseverance in business as he did in escaping from slavery, he will prove an excellent partner for me when increasing years diminish my own energies. I would gradly adopt him, and have him live with us; but I doubt whether such a great and sudden change of condition would prove salutary, and his having a colored wife would put obstructions in his way entirely beyond our power to remove (416).

キングはジョージの財産面だけを支援するのではなく、南北戦争から帰還するジョージに対して仕事を用意する。そして、いずれは「自分の右腕」にしたいとキングは望んでいる。また、黒人の妻を持つジョージが白人社会で生きていくのはまだまだ困難であると考え、ヨーロッパという新天地を用意しようとしている。キングは何の血縁関係もない若者に対し、資金援助だけではなく、仕事を与え、彼の家族が今後平穏無事に暮らしていくために必要な援助はすべて行おうとしている。

**20．ジョージの権利**

“George will not be derived of any <u>his pecuniary rights</u>” (438).

これはキングがジョージに対し、自らの財産を使い金銭的な保障を手配したあとで、ローザに言った言葉である。取り替えによって起こる財産上の最も大きな問題は、それにより「本来持っていた権利」を奪ってしまうことである。本当はローザの子、つまり黒人の血の混じった混血児であることをキングから知らされたジェラルドは本来なら自分の立場にいたであろう異母兄弟について“ I have supplanted in <u>his birthright</u> ” (383). と述べてい

る。つまり、ジェラルドは彼（ジョージ）の“birthright”を自分が奪っているという意識を持っている。取り替えによってジョージは金銭的な権利を奪われた。しかし、キングはその金銭的な権利を自分のお金で元に戻そうとする。それにより「取り替え」という行為に終止符を打とうとした。

キングはジョージに対し、彼にできる最大限の保障をしようとしている。実際にキングはジョージに自らの計画を話し、彼とその家族と一緒にしばらくヨーロッパへ渡る。キングは取り替えによってねじれた財産分与の権利をもとどおりにしようとしただけではなく、黒人として育った白人のジョージが、本来彼のいるべきである白人社会に戻れるように援助している。

第2部の軸になっているのは、ローザが交換した子供たちのその後である。特に、本当は白人のジョージが黒人としてどのような運命を辿ったかは第2部の中心となる物語である。そして、キングはローザの行った赤ん坊の交換行為により生じたねじれを元に戻そうとした。ジョージの受け取る金額や財産という点から見れば、キングは効果的に機能したと言えるだろう。もちろんキングにも黒人奴隷として育ったジョージを白人にすることはできない。ジェラルドは北部の白人として南北戦争で戦い、白人として死ぬ。一方、奴隷として育った白人のジョージは混血の妻を持ち、キングの援助の元で、奴隷として育ったものとして生きていくしかない。キングは金銭的な権利のつじつま合わせをしたに過ぎない。しかし、キングがジョージに対し出来る限りの保障を用意し、それによってローザの感じている罪悪感は和らげられている。そして、キングはジョージに金銭的補償をし、彼に仕事を与え、彼の家族が不自由なく暮らしていけるように整えることにより、物語はハッピーエンドへ導かれていく。

『共和国ロマンス』におけるキングの変化を追うと、彼の役割が第2部において大きく飛躍していることがわかる。キングは、母が象徴する共同体の「お坊ちゃん」から、母の死を経て、自分の共同体を形成し、その中心人物として家族や周囲の人物の人生や生活を支配するまさに「キング」としての役割を担うようになる。

**<Works Cited>**


Bentley, Nancy. "White Slaves: The Mulatto Hero in Antebellum Fiction." *American Literature*, 65.3 (Sept. 1993):502-522.

Child, Lydia Maria. *A Romance of the Republic*. KY: UP of Kentucky, 1867.

Karcher, Carolyn L. "Lydia Maria Child's *A Romance of the Republic*: An Abolitionist Vision of America's Racial Destiny." *Slavery and the Literary Imagination*. MD: Johns Hopkins UP, 1989.

------. *The First Woman in the Republic*. Introd. Dana D.Nelson. Lexignton: UP of Kentucky, 1997.

Newlyn, Andrea K. "Form and Ideology in Transracial Narratives: *Pudd'n Head Wilson and A Romance of the Republic." Narrative*. 8. 1 (Jan. 2000): 43-65.

Sundquist, Eric J. *To Wake the Nations : Race in the Making of American Literature*. MA: Harvard UP, 1993.

Twain, Mark. *Pudd'nhead Wilson*. NY: Penguin, 1894.

Rosenthal, Debra J. "Floral Counterdiscourse: Miscegenation, Ecofeminism, and Hybridity in Lydia Maria Child's *A Romance of the Republic." Women's Studies*. 31. (2002): 221-245.

大串尚代『ハイブリッド・ロマンス―アメリカ文学にみる捕囚と混淆の伝統』東京：松柏社、2002年。

後藤和彦「それぞれの連結―マーク・トウェインと夏目漱石について」『アメリカ文学ミレニアム―Ⅰ』國重純二編　東京：南雲堂、2001年。

下河辺美知子『歴史とトラウマ―記憶と忘却のメカニズム』東京：作品社、2000年。

マーク・トウェイン『まぬけのウィルソンとかの異形の双生児』村川武彦訳　東京：彩流社、1994年。

八木敏雄『アメリカン・ゴシックの水脈』東京：研究者、1992年。